橘守部・純一関係寄贈資料の整理と研究

——第四報・橘純一来翰に見る国文学者との交遊

町　泉寿郎
鈴木　亮

はじめに

「橘守部・純一関係寄贈資料の整理と研究」の第四報として、今回は四代純一を採り上げることとする。寄贈資料のうち純一に関する資料では、洋装本・写真・草稿・書翰とが大半を占めており、特に純一宛の書翰は、未詳の人物の書翰も含め、かなりの量に上る。純一が二十代、三十代であった明治中期から大正期のものは殆ど遺されておらず、師にあたる人物のものが少ないのが惜しまれるが、それでも先輩、同輩、後輩、教え子など様々な人物との交流が窺える好資料である。著名な国文学者や純一の同級生に限っても、麻生磯次、○荒瀬邦介、池田亀鑑、○内田清之助、岡麓、尾上八郎、片岡良一、北山谿太、木村三四吾、倉野憲司、小池藤五郎、鴻巣隼雄、慶野正次、小林一郎、小林好日、○佐佐木信綱、塩田良平、重友毅、○柴生田稔、下條康麿、守随憲治、新間進一、関根俊雄、田中重太郎、○次田潤、次田真幸、○東條操、冨倉徳次郎、○中勘助、成瀬正勝、沼波守、萩谷朴、萩原蘿月、久松潜一、人見圓吉、平林治徳、○福井久蔵、○藤村作、

保科孝一、堀一郎、増淵恒吉、松浦一六、松尾聰、松村誠一、三島一、水野稔、○森繁夫、森泰次郎、安田喜代門、山崎麓、山田準、湯澤幸吉郎、湯地孝、横山英、吉田幸一、吉田澄夫（五十音順）とその名を拾うことができる。このたびはそのなかから○印を附した十名の書翰を紹介し、昭和初期から戦後にかけての国文学界の一動向を探ってみたい。

《凡例》

一、今回収録の十名の橘純一宛書翰は、学校法人二松学舎所蔵にかかるものである。

一、収録順は、姓名の五十音順に従った。

一、先ず発信者の氏名を示し、以下、封書・葉書の別、発信年月日、発信者の略伝を記した。

一、発信年月日は、消印、本文の内容から判断したものも存する。

一、仮名遣いは原文の通りとしたが、漢字は通行の字体に統一した。（但し、固有名詞の表記に関してはこの限りではない。）

一、通読の便を考慮して、新たに句読点を附し、適宜段落を設けた。

一、保存状態などにより、判読が困難な箇所については、その字数文を□で示した。

一、欄外に記入があり、本文に組み込むことが困難な表現については、その表現に＊を附して文末に示した。

一、書翰毎の末尾に【余説】として当該書翰の概要を記した。

荒瀬　邦介（葉書）　昭和二十五年八月六日

あらせ　くにすけ　国文学者。山口県出身。生歿年未詳。『浄瑠璃名作選』（昭和四年、文献書院）、『引歌類聚抄』（昭

和六年、平野書店)、『現代俳句選』(昭和七年、中島書院)など。

東京都大田区田園調布(局区内)久ヶ原町四六五　橘　純一様

山口市大字平井山口(局区内)　荒瀬　邦介

八月六日　(消印)「25・8・8」

玉翰有難く拝誦。其後御無沙汰いたして居ります。益々御健勝の由、お慶び申上げます。小生もお蔭様で無事消日、当地女子短期大学へ週三日八時間(受持学科は貴下と同じ)、野田高等学園へ周三日六時間勤務。尚此外に、当市会議員・教育委員長をつとめ、嫁を相手に五反農耕。老躯を鞭打って殆ど寸暇なく、精神的に又肉体的に、最後の奮闘を続けて居ります。市会議員も来春三月で満期、再出馬をすゝめられて居りますので、目下其の考で進んで居ります。当選すれば学校側と縁切れとなり、少々余暇も出来る事と思ひますが、矢張、精神の緊張が健康には極めて好結果をもたらすやうに思はれます。余命幾何もないとは覚悟の前ですが、お互に健康に留意し、生甲斐ある余生を楽しみたいと思ひます。先は近況御報告旁々、御芳情に対し厚く御礼申上げます。敬具

【余説】

荒瀬邦介は、山口高等学校を経て東京帝国大学に進み、明治四十二年に文科大学国文学科を卒業し、橘純一の東京帝国大学における同級生である。昭和二年(一九二七)設立の京都府立女子専門学校(京都府立大学の前身)に奉職し、同校長を務めた(昭和十年六月〜十六年五月)。この書翰が書かれた昭和二十五年は、橘純一にとって二十三年四月から専任教

授として奉職した二松学舎（二十四年四月大学昇格、二十五年三月より東京文科大学と改称）を辞して跡見女子短期大学の教授に移った時期に当たっており、本書翰に先立って純一から荒瀬にあてた純一の書簡では近況報告としてそのことに言及されていたはずである。一方、荒瀬はこの当時、郷里山口市にもどって地元の山口女子短期大学（山口県立大学の前身、昭和二十五年開学）・野田高等学園（野田学園高等学校、昭和二十三年開校）に教鞭を執る傍ら、市議会議員や教育委員会の委員長を務めていたことが知られる。

内田清之助（葉書）　昭和十三年六月二十七日

うちだ　せいのすけ　鳥類学者。明治十七年（一八八四）―昭和五十年（一九七五）。農商務省・農林省（農務局鳥獣調査室）に勤務し、鳥類学の権威として知られる一方、随筆家としても健筆をふるった。『内田清之助選集』（昭和二十三年、真野出版）・『鳥類学五十年』（昭和三十三年、宝文館）など。

大森区久ヶ原二九五　橘　純一様

東京市渋谷区青葉町八番地　内田清之助（雅印）

六月二十七日　（消印）「13・6・27」

拝復　非常に御無沙汰致しました。御問合せのことは、残念ながら御意見に反対です。理由は、簡単に申上れば、私は自分の習つた頃の小学読本に比して、現在の情操教育と云ふか、そんな方面の材料が大変豊富になつてゐることを常々大変よい事と思つてゐます。そんな意味で、御考のやうな点は少しは寛大でもよいと思ひます。意をつくしませんが、委しく

は何れ御面晤にゆづる。

【余説】

内田清之助と橘純一とは、鍋町小学校、府立一中の同級生で、高等学校は内田が一高（二部乙類）、純一が二高（一部乙類）に進み、東京帝大では純一が文科大学文学科（国文学専修）を明治四十二年に、内田が農科大学獣医学科を明治四十一年に卒業している。内田はさらに大学院に進学して寄生動物学を修めた。内田と純一は専門こそ違え、もっとも長く交際した友人であり、また純一の生家児島家の家産が傾いてからは、内田に学資の援助を仰いだ時期のあることを純一自身が語っている（『国語解釈』三巻十一号、昭和十三年十一月）。そうした関係から、戦争末期、淡路島に疎開して研究生活を続けていた内田が、東京の自宅を戦火に失った後、昭和二十一年春ごろからは大森の橘邸敷地の一部を譲渡されて住んだことがある。

本書翰は、内田が純一の追悼文（「橘純一君のことども」『解釈』六巻二号、昭和三十五年二月）の中でも言及している、「小学国語読本から源氏物語を削除すべし」という純一の主張に対して意見を求められた際の返書である。事態の経緯を簡単に説明すると、昭和十三年四月から小学校六学年で用いられる小学国語読本巻十一第四課に『源氏物語』若紫の一節が現代語訳で収められたのに関して、純一は自ら主宰する国語解釈学会の機関誌『国語解釈』等の誌面において、文部省に対してその削除を要求する記事を数次にわたって発表した。『国語解釈』においては六月号から十月号まで五回連載されている。七・八月号には「反響録」として、会員・貴衆両院議員等からの返書が姓名を伏せて採録されている。賛否両論が掲載されており、ある程度公平な編集姿勢を見ることができる。ここに掲げた内田書翰も八月号に二十七番目の反響として、「農学博士　某氏」の肩書きで収録されている（「意をつくしませんが」の前まで）。

ここで純一の五回にわたる主張を摘要しておこう。六月号の「小学国語読本巻十一「源氏物語」の削除を要求する」においては、『源氏物語』の文章には「頽廃した感情」が「かなり濃厚に」現われており、「文芸としてすぐれたものであるかどうか」ではなく、「小学教育の上に源氏物語が進出してきたことを、教育上の見地から問題にしてゐる」。さらに興味深いのは、同号後記において、『源氏物語』を「国民的作品ではなくして、階級的作品である」、「文学として美であるかもしれない。しかし人生批評として不健全である」とする一方で、「近松の浄瑠璃には、全人間が奉ぜずにはゐられぬ高貴な人間道徳の光明がある。西鶴の浮世草子にも、その向ふ所の方途はともかくとして、潑溂たる精力主義の精神が感ぜられる。源氏物語にさういった全人間的なものがあるか。」と問いかけ、「天下の父兄各位」に対して「愛児たちが、国家の強制の下にこの遊戯三昧恋愛三昧の気にむせかへる文を朗読させられる事をがまんできますか。」と訴えている。教育的見地からの批判ではなく、あくまで文芸としての価値において『源氏物語』は近松・西鶴に匹敵し得ないと断じている点、これを純一の作品評価として見ることが出来るならば興味深い見解である。七月号では「本物語の価値は、宣長翁の「物のあはれ」論の系統から離れて、新しく再検討に附せらるべき」とも述べている（「源氏物語は大不敬の書である」）。

この七月号においては、前号の教育的見地とは別の論点から、「源氏物語は大不敬の書である」と題した文章を草して、従来『源氏物語』の（皇室に対する）不敬が「不問に附されて来た」理由として、純一は「皇室の御尊厳に対し、現今の如き明瞭な自覚を持たなかつた事」をあげる。その「明瞭な自覚」とはなにか。「現代日本は（満洲事変以後現在に至る期間を仮にかくいふ）多大の犠牲を払つて、国史未曾有の自覚を得た」という。それは「天皇の御稜威の下に、吾々は「臣民」としての新しい自覚を以て御大業を翼賛し奉る」ことである。こうした状況下において、「源氏物語の構想が不敬か不敬でないかを」あらためて検討すべきであると提議し、「従来因襲的に行はれてゐた「文学上の価値批判は別だ」といふ考へ方には一顧も与へてゐることができない程、切迫した「臣民」的の重大問題である」と結論付けている。こうした主張

は、その後、十月号の「小学読本「源氏物語」と革新的自覚」においても再論されている。

同号の「小学国語読本巻十一「源氏物語」について文部省の自省を懇請する」と題した文章でも再び教育上の観点と皇室に対する不敬を問題にしている。しかしそれほど否定する『源氏物語』を、奉職する二松学舎専門学校において講じていると自ら告白し、『源氏物語』が「平安朝の言語文章の一大宝庫」である以上、「国語国文学の専門学校」においてはその講究がぜひとも必要だと理由付けている。この点には純一自身、明らかな矛盾を感じている。また『源氏物語』の不敬を指弾することは、この不敬な内容を国民に周知させることにほかならないと感じ、この点にも純一は苦慮していた。こうした意味から、純一の運動のこれ以上の拡大は困難で、「静かにその自省自覚を懇請する」体のものに収束せざるを得なかった。しかしながら、純一の『源氏物語』教科書採用への批判をめぐる議論は、国文学者の戦時下における思考と行動に関する一資料として、注目に値しよう。

純一による『源氏物語』批判に関しては、有働裕『「源氏物語」と戦争』（平成十四年、インパクト出版会）に詳細な論考があるので、併照されたい。

佐佐木　信綱（封書）　昭和二十年七月八日

ささき　のぶつな　歌人、国文学者。明治五年（一八七二）—昭和三十八年（一九六三）。『日本歌学史』（明治四十三年、博文館）、『和歌史の研究』（大正四年、大日本学術協会）、『近世和歌史』（大正十二年、博文館）など。

東京都板橋区東大泉町五〇四　〔貼紙〕大和局区内／陸軍予科士官学校廻送／申出デ

大泉館内　陸軍教授　橘　純一様　御許

（郵便局に申す　万一大泉館戦災にあはれ候はゞ　陸軍士官学校に配達なし下されたく候）

東京市本郷区駒込西片町十〇番地ノ十六　電話小石川七十番（印刷）

熱海市西山立石第十隣組　佐佐木信綱

昭和二十年七月八日　消印「20・7・12」

〔欄外〕余白に御返事願上候。

一、当地には、書物いさゝか持来り候のみにて、橘守部翁の家集も持参せず、その為の御伺ひに候。唯今御国につくしまつる晩年の著作として、古人の忠誠勇武の作をあつめ編纂いたし居候。其中に守部翁のは是非一首相かゝげたく、御集中、国を思ふ歌、時事に関する歌、学者の本分をうたへる歌、武器などをよめる歌、一首にてよきに候へと、三四首此余白に御かきぬき給はらは忝く候。又書物の名は橘守部歌集なりしや、それも御しらせ願上候。

〔以下七行空白〕

一、これはわたくし事にてどうでもよき事、又いそがぬ事にて候。幸に長らへ居候はゞ、自身の年譜まとめ置たく、伊勢小向に守部翁の記念碑の料とて拙き歌認め候やうの記臆あり。もし建設せられ候はゞ、その年月と歌と御わかり候はゞ、御しらせ願上候。或は前に伺ひて御返事をいたゞきしか、記臆うすれ候まゝ伺上候。

〔以下三行空白〕

御本宅御さはりなきやう祈上候。

奥様にもよろしく御申上願候。

まことにきひしき時代に相成。御国の御為尊き教の道に御いそしみ下され給候事と忝く存し上候。爾来御無音のみ謝上候。

昨暮十八日、寒さをさくる為当地の社友の家に来り、つい其まゝかりすむ事と成居候。山の上とて、湯も一月以上いてす、物乏しく老年の為もあり、つかれはけしく、□りて失礼御ゆるし願上候。たゞ御国につくしまつる片はしにもと日々著作の筆をおかず、御伺ひ申上候次第に候。かしこ

七月八日　　佐々木内

橘　様　御許

【余説】

信綱は、純一が歿した際に「かなしきかも守部の大人の後をうけて道きはめまさむ君と思ひしを」という弔歌を詠んでおり、その交情の深さが窺えるものである。書翰中「伊勢小向に守部翁の記念碑」に自詠を認めたとあるが、これは、昭和十七年八月、小向神社（三重県四日市市朝日町小向）境内に建てられた「讃橘守部歌」の碑（をふけのやこゝにおひたちし立華のたかきかをりは天の下にとはに　昭和十七年四月八日）のことである。熱海市の社友の家に移住したについては、信綱自身、

昭和十八年の四月の末、生死の大患にかゝつて数月を臥床に過した。幸に西川、山川二博士のおかげにより、蘇生することを得たが、その後は一方に静養しつゝ、一方に晩年の著作に専心したく、山川博士、下村海南博士の切に勧められるまゝに、十九年十二月、同人なる工学士西原民平君の好意により、熱海市西山なる君の別墅に仮寓することとなった。

（佐佐木信綱『ある老歌人の思ひ出』昭和二十八年、朝日新聞社）

と記していることからも明らかである。斯様にこの時期、七十四歳（数え）の信綱は、著述に専念し「古人の忠誠勇武の作をあつめ」ようとしていたものの、結局その企ては実現せずに了った。

柴生田　稔（封書）

しぼうた　みのる　アララギ派の歌人、国文学者。戦後は明治大学、駒沢大学教授を務めた。明治三十七年（一九〇四）―平成三年（一九九一）。『斎藤茂吉伝』（昭和五十四～五十六年、新潮社）、『万葉の世界』（昭和六十一年、岩波書店）など。

大森区久ヶ原町二九五　橘　純一先生　侍史

世田谷区代田一ノ六三二　柴生田　稔

拝啓　ペン書きで失礼申上ます。国語解釈をわざわざ御恵送下さいまして、忝く頂戴いたしました。実はあとから国語解釈に出てゐたのではなかったかと、心づきましたが、既におそく御親切に御教示にあづかりまして、恐縮の至でございます。先進の業績に対する平素の不注意不勉強を暴露いたしましたわけで、まことに汗顔に堪へません。編輯部の答解を拝読しまして、御意見は一層よくわかりました。右につき、只今草卒のうちに気づきましたことを、一二書きつけて御示教を得たいと存じます。

鵜河多多左禰（四一九〇）、宇加波多知（三九九一）、宇加波多知家利（四〇二三）の三例は、御説の如く他動と考へるのが自然で、山田孝雄氏説のごときはどうも不自然のやうに思はれます。但し、之流久之米多底（四〇九六）の一例は、奈良朝時代に於ては、下二段、さ変、か変等皆四段と同様「よ」のつくことを要しなかった、と考へられますので（これは答解にも触れてありますが、なほ下二段の例として、仏足石歌の、都止米毛呂毛呂須須売毛呂毛呂の如きがあり、か変も源氏物語を引くまでもなく万葉集にも用例があります）。この例は、統計のaよりもcに入れるべきものかと愚考いたし

ます。

それで、他動四段と認められるものは、「鵜川立つ」の三例と考へられ、これは答解にもありますやうに、「固定した用法」である点が弱みかと存ぜられます。それで私にはどうも「下二段に対して四分の一の対抗力を持つてゐる」とまでは考へられないのでございます。

平安朝和歌に於ける「名を立つ」の慣用例は、確に興味のある現象であり、もつと検討を要する問題であると存じます。ただこれも後代の特殊用法ゆゑ、万葉の訓を決定する材料としては（答解の態度もさうでありませうが）、大いに有力とまでは言へないかと存じます。

要するに、「『名は立たずして』の訓方にも若干の支持力があるやうに感ぜられてくる」といふ気持までは、御同感出来るのでありますが、現在の材料のままでは、やはり「立たずして」を成立させるまでに行かぬ。「名は立てずして」に定めざるを得ないのではないか、といふのが只今の私の気持でございます。但し、「この他動四段の『立つ』を認めんとする気持は、全くかういふ特例に無知であるがために、『名は立てずして』でなくてはならぬと断言する側の人よりは、よほど学問的の深みを持つものと言はなければならぬ」とあります処は、まことに有難い教訓と深く感銘するものであります。

草卒の中に書きつけましたので、思ひ誤りも定めしあらうかと恐れてをります。いづれ御目に掛りまして、色々御意見うけたまはりたく、なほ今後も今少し用例を調べ、「鵜川立つ」「名を立つ」（平安朝）の特殊例についても考察して見たい願望をいだいてをります。

なほ御指導を得ば幸甚に存じます。御親切なる御教示にあまえて、ついくどくどと書きつけました。

失礼の段、何とぞ御海容願上げます。　　敬具

十四日午前　　稔

橘　先生　侍史

【余説】

柴生田は、昭和十五年十二月に、陸軍予科士官学校国語教授を嘱託されている（本務は明治大学予科教授。翌年七月には、明治大学を退職し陸軍教授）。そこで当時国語科主任であった純一（十六年四月赴任）は、柴生田の授業振りを見て、「君の授業はだめだ。もう少し他人の授業を参観しなさい。増淵君（恒吉）はうまいから、あれを見たらよい」と言ったそうである（長野甞一『学者評判記（上）』昭和四十二年、有朋堂）。なお、増淵恒吉の純一宛書翰も寄贈資料のうちに存する。

本書翰は、純一から『国語解釈』が送付されたことに対しての礼状であるとともに、その内容について純一の示教を得たいとするものである。当該の『国語解釈』は昭和十三年十二月に刊行されている（三巻十二号）ので、それ以降の書翰であろう。本書翰で指摘されている問題は以下の通りである。

左の歌の第五句「名者不立之而」を「名は立たずして」と訓むのと、「名は立てずして」と訓むのといづれがよいでせうか。（なほこの歌は小学読本巻十二に出てゐます）

士也母（オノコヤモ）、空（ムナシカルベキ）　應、萬代爾（ヨロズヨニ）、語續可（カタリツグベキ）、名者不立之　（万葉集六、山上憶良）

この「課題」が『国語解釈』十月号に掲載され、それに対する「答解」が十二月号に示された。九氏の「答解」に続き、純一自らが「編輯部の答解」を執筆しているものの、「立たずして」「立てずして」いずれにすべきかは決しかねている。

次田　潤（封書）　昭和十六年十月十三日

つぎた　うるう　国文学者。明治十七年（一八八四）―昭和四十一年（一九六六）。戦後は立正大学教授を務めた。『万葉集新講』（大正十年、成美堂）、『古事記新講』（大正十三年、明治書院）など。

大森区久ヶ原町二九五　橘　純一様

豊島区池袋三丁目一五三九　次田　潤

拝啓　その後暫くお目にかゝりませんが、相変らずお元気で何よりの事に存じお喜び申上げます。昨今は入学選抜試験中の御様子定めし御忙しい事と存じます。

さて此度は、守部翁の名著稜威言別を御校訂になり、いよ〳〵御出版になりましたについて御心にお掛け下さり早速一部御恵み下さいまして、御高情のほど誠にあり難う存じます。丁度記紀歌謡につき調べてをります折からとて、早速利用させてをりますが、一巻にまとまりましたものは何かと便利に存じます。重ねて篤く御礼を申し上げます。

先般来愚息が士官学校へ御採用願ひたく切望致してをりますにつけても、何かと御高配を煩はし申訳なく存じてをります。万一御尽力により御採用下さいますならば、親としても此の上なき満足であります。何れ参上御願申上げたく存じてゐますが、序ながら懇願申上げます。右拝受の御礼を申上げ旁御願を申上げた次第であります。時節柄御自愛を祈り上げます。

十月十三日　　潤

橘　様　侍史

【余説】

純一と次田潤とは、東京帝国大学同期卒業（明治四十二年）である。純一が自ら校訂をつとめた守部の著『稜威言別』（昭和十六年、冨山房）を送付したことに対しての礼状である。書翰中「士官学校」を志望している「愚息」とあるは、潤の子息、香澄（都立日比谷高校教諭、山梨県立女子短大教授、中世文学。一九一三―一九九七）のことであろう。香澄は、東京帝国大学大学院修了（一九三七）後、母校である府立五中の教諭（一九三八～四二）をつとめ、五中を退職した昭和十七年、陸軍航空学校に職を奉じている。なお、寄贈資料中、潤の長男真幸（お茶の水女子大学教授、上代文学。一九〇九―一九八三）の書翰も存する。

東條　操（封書）　昭和二十五年八月十七日

とうじょう　みさお　国語学者、学習院大学教授。明治十七年（一八八四）―昭和四十一年（一九六六）。『国語学新講』（昭和十二年、刀江書院）、『全国方言辞典』（昭和二十六年、東京堂）、『分類方言辞典』（昭和二十九年、東京堂）など。

大田区田園調布局区内久ヶ原町四六五　橘　純一様

八月十七日

東京都練馬局区内豊玉北四丁目二一　東條　操

昨日は七時近くに帰宅、二回まで練馬の奥に御足を御運び願つた事を承り大に恐縮して居ります。

福井先生の事、老生もいつも気にしながら御承知の消極性と不精とのため、そのままにして居りました。この夏は実は

先生の御そばにも上つて居りませんが、近頃いくらか御元気がないのではないかと気づかつて居ります。大兄がお乗出し下さるのはまことに幸です。驥尾に附していくらかでも御役に立ちたいと存じます。この件では山岸徳平さんも心配して居られます。あの人は中々やり手ですから相談に乗つていたゞいたらどんなものでせう。どんな仕事をどんな範囲でするか、有志があつまつて先生を囲んで一夕を送るといふ程度ですますか、一般に醵金でも募つて先生の御手元に差上げるか、などいろいろな問題もあらうかと存じます。この春の杉先生の為の会は一高の連中が大に活躍して大成功をおさめたやうです。とてもあんなわけには行きますまいが、何とか先生に喜んでいたゞければと存じます。

さて、来週月曜日二十一日、午後一時学習院研究室まで御運び下さるとの御申置ですが、それではあまり恐縮です。今度は老生が同日跡見学園短期大学に大兄を御尋ねいたします。どうぞ一時少し過ぎまで跡見でお待ち下さいませんか。もつとも御出校の時間によつては午前中に参上してもよいのです（跡見は例の茗蹊会館の裏でせう）。御都合のよい時間御示し願ひます。右御詫かたがた。

なほ、当日突然何かの都合で伺ひ兼ねるやうなら（と申しますのは妻に急用が出来て外出されますと留守にできないので）必ず自宅に居りますから、その節は（電話がうまくかゝれば）御連絡いたします

八月十七日　　東條生

橘　大兄　侍史

＊話が行き違ふといけませんから、御不都合でない限り跡見で御待ち願ひたいと存じます。

【余説】

純一は、明治三十五年三月、東京府立第一中学校（現、東京都立日比谷高等学校）を卒業しており、東條はその後輩に当たる（明治三十七年卒業）。そうした縁で、『国語と国文学』（三十一巻四号、昭和二十九年四月）には、「橘純一君を悼む」の一文を寄せている。

「福井先生」は、一中時代の純一・東條らの恩師、福井久蔵（一八六七―一九五一）のこと。福井の体調が思わしくない旨記されているが、果して翌二十六年十月二十三日、不帰の客となってしまう。純一と一中の同期にして、その後東京帝大文学科（国文学専修）に学んだ人物としては、山崎麓（近世文学、同期）、小林好日（国語学、明治四十五年卒業）がいる。「山岸徳平さん」は、当時東京教育大学教授（一八九三―一九八七）。新潟県師範学校、東京高等師範学校を経て、大正十三年、東京帝大卒業。晩年は実践女子大学学長を務めた。専門は日本漢文学・和歌文学・説話文学など多岐にわたる。「杉先生」は、『吾輩は猫である』の津木ピン助のモデルとして名高い、一高校長杉敏介（一八七二―一九六〇）。杉は、明治三十二年から二十五年もの長きにわたり一高で教鞭をとった。なお、東條は、明治四十年一高卒業（その当時の校長は新渡戸稲造）。同四十三年東京帝大卒業。静岡高校教授などを歴任し、昭和七年より学習院教授。純一は、この手紙の記された昭和二十五年より、跡見短期大学教授。

中　勘助（葉書）　昭和二十四年四月六日

なか　かんすけ　小説家。明治四十二年、東京帝大卒業、純一の同期生。明治十八年（一八八五）―昭和四十年（一九六五）。小説『銀の匙』（大正十年、岩波書店）など。

田園調布局区内大田区久ヶ原町四六五　橘（たちばな）　純一様

中埜局区内新井町四七一　中　勘助

四月六日

四月五日附の御葉書拝見、次田氏を次期の国語国文学会評議員の候補に推薦の件承知致しました。何分宜敷御願申上げます。

卒業以来四十年もお目にかかる機会を得ませんでしたが御機嫌お宜しくて頂上に存じます。学校時代の御様子はよく覚えてをりますが今どこかで偶然お逢ひしましても到底わかりませんでせう。過日思ひがけぬ事から福山の瀬尾氏からお便りを頂きました。十八名の同期卒業者中過半数逝去とは何共心細き次第。併し大震災にも今度の爆撃にも命拾ひをしましたのはお互ひまづまづ幸運の方と思ひます。

【余説】

帝大卒業以来四十年ということは、昭和二十四年の葉書ということになろう。「次田氏」は、東大同期卒業の次田潤（一八八四―一九六六）。次田は、当時立正大学教授（国文学科主任）。古事記の研究家として著名である。「国語国文学会」は、東京大学国語国文学会のことであろう。「福山の瀬尾氏」は、東大同期卒業の瀬尾武次郎。『謡曲の研究』（大正三年、内藤金桜堂・山口屋書店）という著述のある国文学者であることは知られるものの、伝記は未詳。十八名の同期とは、次田潤・青木正・高木武・×山崎麓・橘純一・×林訒・中勘助・荒瀬邦介・×塚田芳太郎・白石勉・×和田卯吉・×鈴木周作・堀川美治・×三矢英松・和田廉之助・瀬尾武次郎・大矢泰英・×藤田篤のことである。「過半数逝去」とあるが、『東京大学卒業生氏名録』（昭和二十五年、東京大学）に拠れば、物故者は、×印を附した七名である。

福井　久蔵（封書）　昭和十六年五月二十五日

ふくい　きゅうぞう　国語学者・国文学者。慶応三年（一八六七）―昭和二十六年（一九五一）。『日本文法史』（明治四十年、大日本図書）、『日本新詩史』（大正十三年、立川書店）、『大日本歌書綜覧』（大正十五年～昭和三年、不二書房）、『枕詞の研究と釈義』（昭和二年、不二書房）、『連歌乃史的研究』（昭和五～六年、成美堂書店）、『秘籍大名文庫』（昭和十二～十三年、厚生閣）、『国語学大系』（昭和十三～十九年、厚生閣）など。

大森区久ヶ原町二九五　橘　純一様　至急御願用

五月廿五日

池袋三―一三七七　福井久蔵

連日雨もやう別に御障も御坐なく候や。駒沢には多年御尽瘁いたゝき候事ゆゑ、送別会開催の件、高村君に依頼いたし居候へとも、また其運に不到、失礼仕居候。貴下には士官学校の方、国文科の統一や教科書編纂など御多用之趣、いつも仕事に御熱心之御性質むりをなさらぬやう切に希望いたし居候。さて卒爾之至に候へとも、東洋大学々部に本年、国語学概論開講の事に定まり居、安藤正次君を御願いたし居候処、仝君台湾大学総長に任命相成につき、其後をついて御教授を願ふ方をいろいろ考へ候へとも、貴下の外には無之と学校当局に申答へ置候。時間は午後いつにても宜しく候。士官学校の方御忙しき事を存じつゝ申上候は、甚相済不申候へとも、最近私は同大学国文科主任に無理に頼まれ、断致置き候を事後承諾之体にておしつけられ、渋々引受いたし候。就ては私を御助被下意味と同大学一般の嘱望する処御察し被下、本年丈け国語学何にても宜しく候間、一週二時間御引受被下訳に不参候や。実は御無沙汰も致居、旁々御伺之上と存じ候へと

も、御承知のごとく無人にて、乍失礼書中を以て御願申上候。いつれ其中、学校当局の方御伺可被致候へとも、不取敢寸楮を以て御都合御伺申上候。敬具

五月廿五日

福井久蔵拝

橘　純一様　玉案下

【余説】

福井の履歴は、渡辺三男「福井久蔵博士の人と学問」（『駒沢国文』二十号、昭和五十八年二月）が参考になる。それによれば、兵庫県師範学校を出た福井の教員歴は、神戸区高等小学校訓導（一八九〇～九四）にはじまり、中学校国語科検定試験に合格して山口県立中学校教諭（一八九五～）を経て、東京府立第一中学校教諭（一八九八～一九〇五）となった。府立一中教諭時代には上田万年・芳賀矢一らの研究会（水曜会）に参加するかたわら、東京外国語学校でドイツ語を学んだ。ついで上田万年の推挙により学習院教授（一九〇五～二四）となり、さらに駒沢大学教授（一九二五～四四、東洋学科主任）に移り、ほかに早稲田大学・東洋大学にも出講した。

純一にとって福井は、府立一中の五学年次（明治三十四年度）における担任教諭であった。橘文庫には「福井久蔵先生長寿祝賀記念会参加者各位芳名録」（年代未詳）という油印版の一枚刷りが残されており、三十三年担任生四人、三十四年担任生十人、三十五年担任生二十三人、三十六年担任生二十一人、三十七年担任生七人、三十八年担任生七人、計七十二人の出席者名が記されている。純一らの三十五年三月卒業組は「如蘭三五会」という同窓会を結成しており（「如蘭」は府立一中・日比谷高校同窓会の名称）、とりわけ結束が固かったとみられる。前記「芳名録」から著名人をひろえば、三十三

年組では小牧健夫（独文学）、三十四年組では河田烈（大蔵官僚、幕府儒者の後裔）・武田久吉（登山家）・朝倉希一（機械工学）、三十五年組では内田清之助（鳥類学）・中島董一郎（実業家）・下條康麿（政治家）・中野治房（植物学）・日比勝治（実業家）・霜鳥正三郎（画家）、三十六年組では市河三喜（英語学）・黒田朋信（美術評論）・小山鞆絵（西洋哲学）・亀井高孝（西洋史学）・田島道治（実業家）、三十七年組では土岐善麿（歌人・国文学）・生源寺順（農業経済学）・石坂泰三（財界人）・関屋龍吉（弓道）・東條操（国語学）、三十八年組では谷崎潤一郎（小説家）・辰野隆（仏文学）・大島堅造（銀行家）など、文字通りその多士済々を知ることができる。「芳名録」には名を連ねないが、山崎麓（国文学者、三十五年担任）・小山内薫（劇作家）もその教え子にあたり、文学の研究・創作に進んだ者が少なくなく、福井の誘掖するところの小さくなかったことが想像される。

本書翰は、封筒の切手貼付部分が切り取られているため消印を欠き、年代の特定は、文中にみえる安藤正次の台湾大学総長拝命の記事による。国語学者・安藤正次（一八七八―一九五二）には中村忠行「安藤正次先生略伝・年譜・著作論文目録」（『安藤正次著作集　七巻』昭和五十年、雄山閣出版）が備わり、その年譜によれば、台北帝国大学教授（文政学部、一九二八～四〇）を退官した翌昭和十六年四月に総長に補せられている（～一九四五）。

台北帝大を退官した安藤を、東洋大学が早速迎えて、十六年度から「国語学概論」を担当させる予定であったところ、翌年安藤が総長として再び渡台することとなったため、その代替の人選が難航していたのである。一方、純一は昭和十六年には陸軍士官学校の教授（国漢科）となり、それに伴って専任教授であった二松学舎専門学校をはじめ、駒沢大学・日本女子大学などへの出講を辞することとなった（関根俊雄編「橘純一教授略年譜・著作目録」『国語と国文学』三十一巻四号、昭和二十九年四月。また『解釈』六巻二号、昭和三十五年二月）。また、東洋大学は純一にとって二松学舎専門学校の専任教授になる以前、出講したことがあり（一九二六～二八）、無縁の大学ではない。福井は東洋大学の国文科主任として、

安藤の後任人事に責任を負う立場にある。そこで福井は、純一の多忙は承知しているが、他に東洋大学での「国語学概論」を頼める人材がいないので、一年だけでよいからと出講を懇請している。このとき純一が福井の請いを納れたかどうかは未詳で、『東洋大学人名録　役員・教職員　戦前編』（平成八年、東洋大学井上円了記念学術センター）に拠れば、昭和十六年度「国語学概論」担当の教員は安藤正次となっている。

藤村　作（封書）　昭和二十年十二月九日

ふじむら　つくる　国文学者。東京帝国大学教授。明治八年（一八七五）―昭和二十八年（一九五三）。福岡県柳河出身。『上方文学と江戸文学』（大正十一年、至文堂）、『近世国文学序説』（昭和二年、雄山閣）、『常道を行くもの』（昭和十四年、むらさき出版部）、『訳註西鶴全集』（昭和二十二～二十八年、至文堂）など。

大森区久ヶ原町二九五　橘　純一様

世田谷区烏山町六九〇　藤村　作

（消印）「20・12・□」

敬啓　貴下益御壮健、邦家の為に奉慶賀候。さて帝国は今や千古未曾有の大難局に逢著致し、真に御同憂に不堪候。右につき小生今般、全国的なる国文学会を結成し、諸君と共に国文学者の一大団体としてこの難局に処し、平和文化国家新建設に貢献致度存立ち候。就いては貴下にも是非発起人として御参加御尽力被下度奉懇願候。不取敢来る廿四日午後一時本郷区元町日本出版文化協会会議室（五階）に於て発起人に御願申上候方々の御会合を願ひ、御高見拝聴且御相談申上度存

候。御多用中御繰合はせ被下御出席被下度御願ひ申上候。頓首

十二月九日　　藤村　作

橘　純一様

【余説】

純一にとって藤村は、九歳年長の国文科の先輩にあたり、東京帝大在学中の恩師ではないが、純一の助手時代（明治四十四年九月〜）にはすでに藤村は助教授として着任している。藤村については、『近代文学研究叢書』第七十四巻（平成十年、昭和女子大学近代文学研究室）に平井法の執筆にかかる事績を収めるほか、『国語と国文学』（三十一巻二号、昭和二十九年二月）の追悼号が参考になる。それらによれば、藤村は五高を経て東京帝大に国文学を学び（一八九八〜一九〇一）、七高（一九〇一〜）・広島高師（一九〇三〜）の教授を経て、早世した藤岡作太郎助教授（一八七〇—一九一〇）の後を受けて東京帝国大学助教授（一九一〇〜、のち教授一九二二〜三六）となり、近世文学、特に近世小説の研究を開拓し（学位論文『近世小説研究』一九一九）、明治文学研究にも先鞭を付けた。一方で、雑誌創刊（『国語と国文学』一九二四、『国文学解釈と鑑賞』一九三六、『国語教育誌』一九三八）、文学講座（岩波講座「日本文学」一九一七など）の編纂、辞典編纂（『日本文学大辞典』新潮社、一九三一〜三七）、また学会組織の創設などを通して、昭和初期における国文学の振興と普及を主導した。

戦時下においては、北京師範学堂・北京女子師範学堂の名誉教授となり（一九三九〜四五）、北京にあって文教政策に従事することが多かったが、健康状態と戦局の悪化により二十年五月に辞職・帰国。帰国後いちはやく七月三十一日に東郷茂徳にあてて対中国政策について認めた書翰の書影が、『国語と国文学』三十一巻二号（昭和二十九年二月）追悼号の巻頭

に掲げられている。最晩年の病床で門人に「現今の精神的な頼り所として、是非とも新憲法の前文を推奨したい。」（鶴見誠「偉大なるお人柄」『国語と国文学』三十一巻二号）と語るなど、国家の経綸と研究教育に関する判断力は衰えることがなかった。

終戦後の昭和二十年十二月九日に書かれた本書翰は、今こそ全国的な国文学会組織を結成し、国文学者として平和文化国家の建設に貢献すべきと考えるので、その学会結成の発起人として近日開催する会合に出席してほしいと純一に依頼する内容である。この学会組織は、恐らく翌二十一年六月に設立され藤村がその会長に就任した「日本文学協会」のことと考えられる。「日本出版文化協会」は、戦時下の出版統制のために結成された組織である。

森　繁夫（封書）　昭和四年七月十五日

もり　しげお　実業家、短冊収集家。明治十五年（一八八二）―昭和二十五年（一九五〇）。蔵書は大阪市立大学学術情報総合センターに「森文庫」としてのこる。『人物百談』（昭和十八年、三宅書店）、『古筆鑑定と極印』（昭和十八年、雅俗山荘）、『名家伝記資料集成』（昭和五十九年、思文閣出版）など。

東京牛込市ヶ谷仲之町四一　橘　純一様　侍史

森繁夫　大阪市西成区□□東之町三丁目十□□地　電話住吉二五三□番（雅印）

拝啓　益御清適奉察候。扨御高祖御伝記資料御送付に預り、難有奉鳴謝候。少数御発行之貴重なる御書と申、内容稀覯なる資料と申、実に好個之御記念、故大人地下に御満足之御事に奉存上候。考証的に所獲頗る多く、まことに仕合に奉存上

候。甚だ失礼之儀に候も、御実費または御記念会々費といふやうなもの有之候はゝその方にても何程か為送いたし候か、よろしく御指図の程願はしく候。故大人御短冊少々家蔵に有之、昨年伊勢徴古館の会へ出陳いたし候事に御座候。鎌倉右大臣によそへし御歌の半折は、過日貴地の玉鉾会へ出陳いたし候事に御座候。先は右不取敢御請御礼まで申上度如斯御座候。頓首　藤繁夫

橘　純一様　侍史

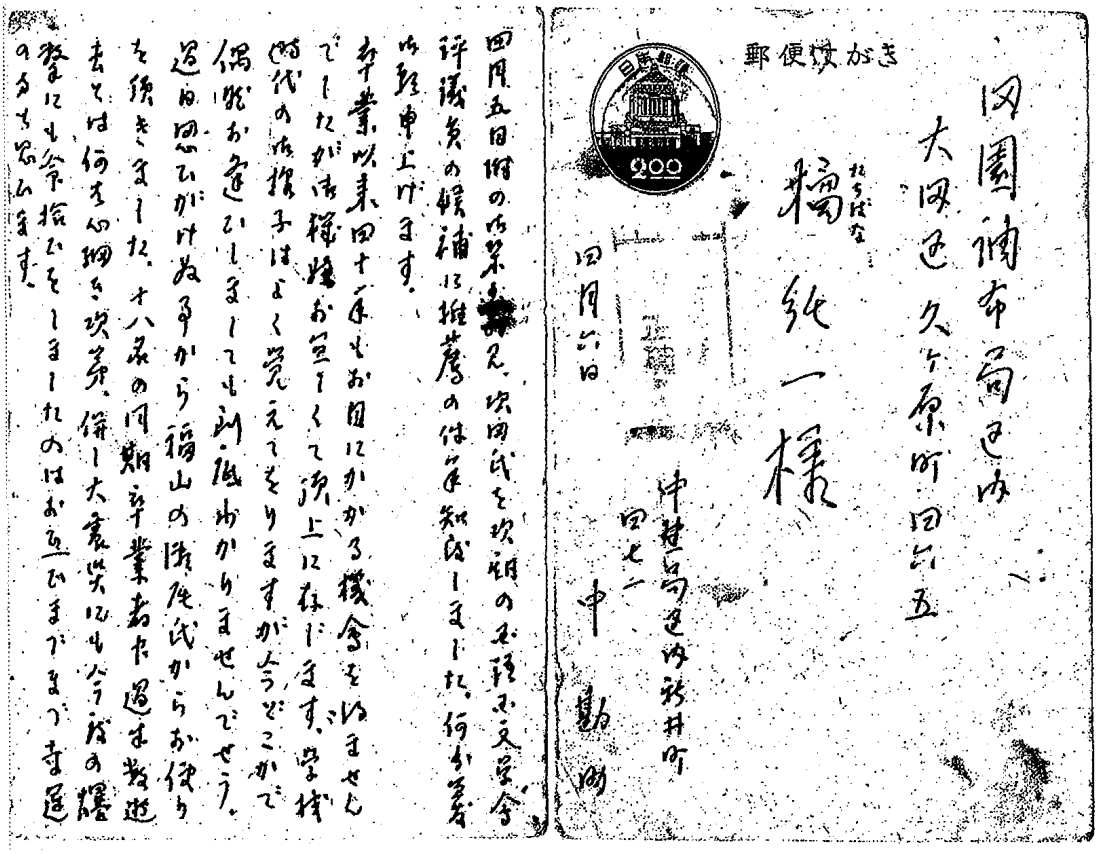
昭和四年七月十五日

尚々お目にかけ候やうなものには無之候得共、拙著「田捨女」一部入御覧申候。

【余説】

森繁夫は、摂陽汽船・大阪商船などの要職にあった関西海運業界の人物で、かたわら佐佐木信綱門下の歌人、また短冊の収集家としても知られ、国学者・歌人を中心とした近世人物伝に精通した（『名家伝記資料集成』の編者略歴による）。

本書翰は、純一が私家版として発行した『贈位記念橘守部伝記資料』（昭和四年四月）を、森が純一から送られたのに対する礼状である。前年の昭和三年十一月十日、昭和天皇即位の大典に際し、橘守部に正五位が追贈されたのを記念して、この年四月に学士会館において「歿後満八十年贈位奉告祭」が行われた（関根俊雄編「橘純一教授略年譜・著作目録」『国語と国文学』三十一巻四号、昭和二十九年四月）。前記の伝記資料はこれを機会に作成されたものである。森からは、伝記資料の実費納付に関する申し出とともに、架蔵する橘守部の短冊についての情報提供があった。『田捨女』はこの前年昭和三年に刊行された森の著書で（青雲社刊、西園寺公望題字・井上通泰題歌・藤井紫影序）、江戸前期の丹波氷上郡柏原の女流俳人田捨女（一六三三―九八）の伝記。森がその事跡を発掘して世に紹介した人物である。



郵便はがき

図書補充部

大阪市久宝寺町四丁目五

橘純一様

四月六日

中部司令部

四七一

中勘助

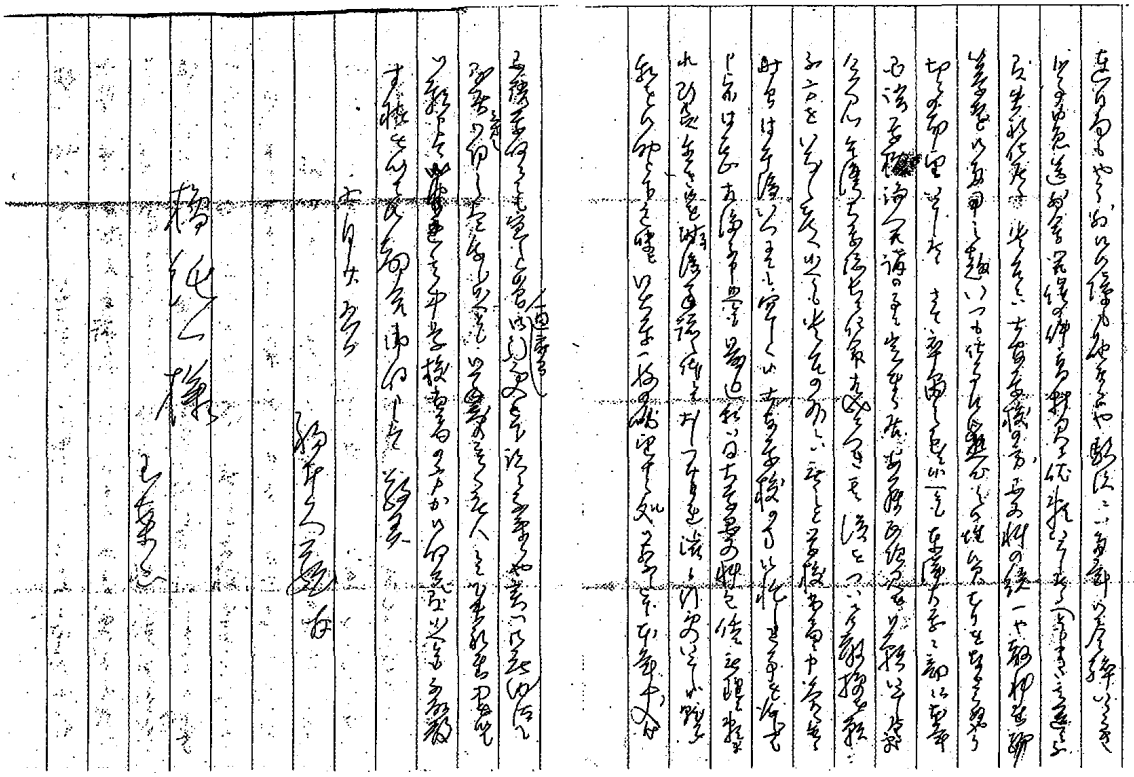
四月五日附の内示を[redacted]、次回氏を次期の委員候補に推薦の件確かに拝受しました。何かと考慮申上げます。

卒業以来四十年もお目にかかる機会を失ませんでしたが時勢お互いに変りましたが、当時の内情はよく覚えてをります。学校偶然お逢いしましても別に恥かしくありませんでせう。

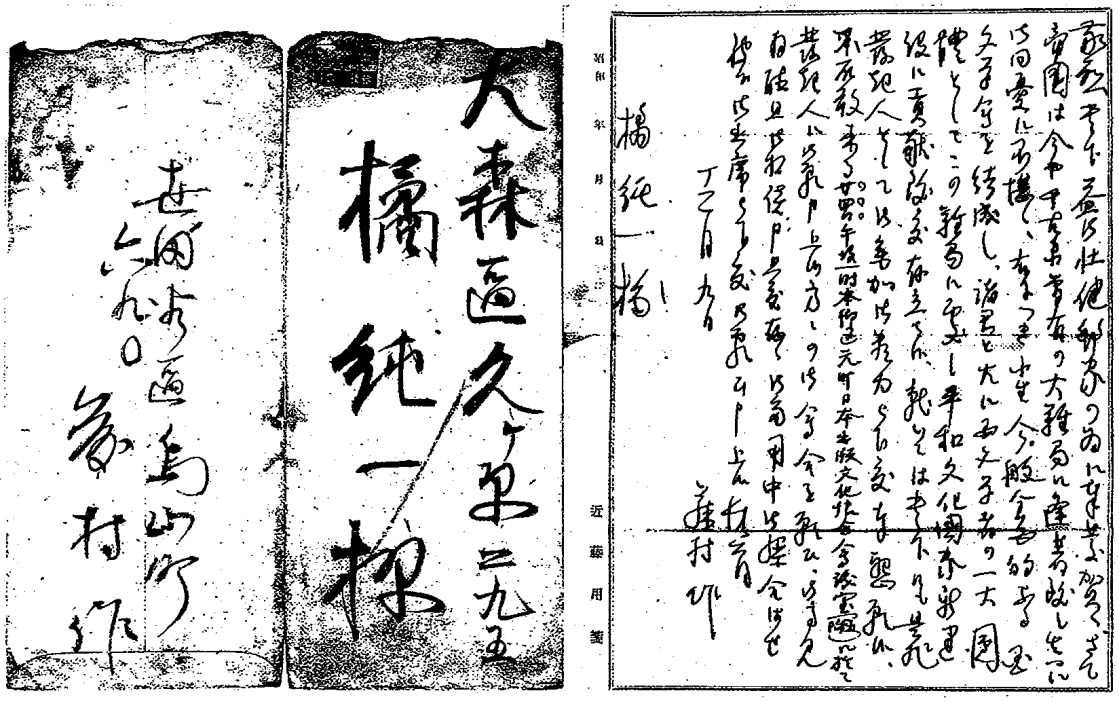
過日思ひがけぬ事から福山の陸氏からお便りを頂きました。十八歳の同期卒業者に過ぎ数年去とは何とも物寂しく、併し大変嬉しいものです。

整にも余程ひをしましたのはお互ひまでまつ寸法の為と思ひます。

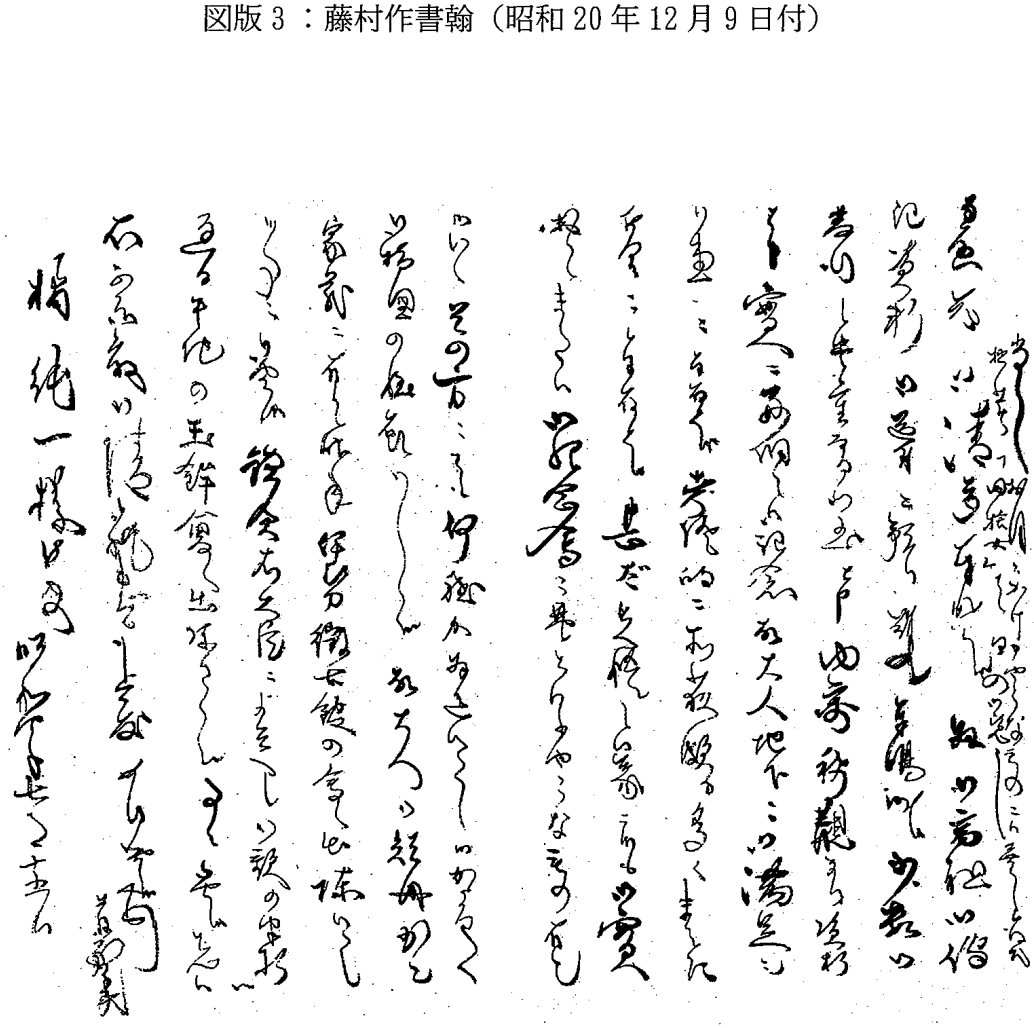
図版１：中勘助葉書（昭和 24 年 4 月 6 日付）



図版２：福井久蔵書翰（昭和 16 年 5 月 15 日付）



図版 3 ：藤村作書翰（昭和 20 年 12 月 9 日付）



図版 4 ：森繁夫書翰（昭和 4 年 7 月 15 日付）